

# コロナ禍におけるZoomを使用した ビブリオバトル授業の実践と考察

太 田 真 理

**要旨** ビブリオバトルとは、自分が興味を持ち選んだ本の素晴らしさを発表しあう、勉強会的一种である。その場でチャンプ（チャンピオン）本を決めることで、ゲーム性もあるのが特徴である。

筆者は、2018年度から「日本語技法d」の授業を担当し、対面授業のなかでビブリオバトルを実施してきた。その目的は、日本語の技法の中でも「話す」「聞く」技法を伸ばすことである。対面授業では、教室内で小グループに分かれて実施した。その結果、学生から「話す」「聞く」力がついた実感が得られたとのリアクションがあった。また、他学生と読書を通じて交流ができ楽しかったと、好評であった。

2020年度、筆者は、コロナ禍の中で広く普及したZoomを使用するオンライン授業で、幾つかの工夫を施してビブリオバトルを実施した。本稿は、その工夫を含むビブリオバトル実践の概要とその考察を述べたものである。

オンラインのために工夫した主な点は、①Zoomのブレイクアウトセッション機能を用いて事前に学生同士1：1の発表練習を行ったこと、②発表時は小さなグループではなく、Zoom画面の全員に向かって発表することで、クラス全員の発表を共有したことである。

Zoom授業の成果としては、ビブリオバトルの基本目標（①読書を楽しむ②自分の読書の楽しさを他者に伝える③他者の読書の楽しさを共有する）を、概ね達成することができた。これは、オンライン授業でも、「話す」「聞く」力を伸ばす授業の質を保持することができたことを意味する。同時に、コロナ禍にあってクラスの交流や連帯感が感じにくい中でも、共に学ぶ環境と一体感を醸成することができたと考えている。これは、授業実施当時、社会的にも問題となっていた、学生の孤独感や、質問や交流がしにくい一方的な授業（オンライン授業）への不満の解消にも役立つものである。

**キーワード：**日本語技法、オンライン（Zoom）授業、ビブリオバトル

## Introducing Biblio Battle in Online Zoom Classes during the COVID-19 Pandemic: Implementation and Evaluation

OTA Mari

**Abstract** “Biblio Battle” is a study method by which participants present their favorite books to each other with a focus on what impressed them. It has game features with a “champ book” (“Champion Book of the Day”) being selected by the participants.

Since 2018, the author has been in charge of the “Japanese language techniques (d)” course, and has used Biblio Battle in the face-to-face classes with the purpose of enhancing Japanese language techniques; in particular, speaking and listening. Students in class were divided into several small groups. At the end of the course, the students gave positive feedback that their speaking and listening skills had improved and that they enjoyed the intensive discussions on the topic of books.

In 2020, online Zoom classes became widely used due to the COVID-19 pandemic, and the author began using a version of Biblio Battle modified for the online environment. This paper describes how Biblio Battle was modified and examines the results.

Major modifications for the online style were: (a) using the “breakout session” in Zoom, where students were able to rehearse their presentations on a one-on-one basis; and (b) bringing the students back in the main session for the final presentation, making it possible for each student to present to the entire class.

This Zoom-based class achieved the basic purposes of Biblio Battle: (a) enjoying reading; (b) delivering one’s own joy of reading to others; and (c) sharing the joy of other students’ reading. This shows that an online class can match the quality of face-to-face classes in developing speaking and listening skills. In addition, through this online Biblio Battle, camaraderie was cultivated among students despite the COVID-19 environment, which has made it difficult for students to socialize and to build a community to learn together. These effects might help mitigate growing dissatisfaction with online classes which are broadly thought of as generating a feeling of loneliness among students and often seen as one-sided with difficulties of raising questions and communicating with other students.

**Key words:** Japanese language skill, Online (Zoom) class, Biblio Battle

## はじめに ——Zoomを使用したビブリオバトル授業実施の経緯

2020年1月上旬に国内で初めて新型コロナウイルス感染症が確認されて以来、大学等の教育現場でもこれに対応すべく、様々な対策をとることを余儀なくされた。当初予定していた対面授業を、ほぼ全てオンラインで行うこととなったのは、学生にとっても教員にとっても初めての経験であった。

今回取り上げる「日本語技法d」は、2020年度後期に設定された授業であった。後期授業が始まる9月下旬は、新型コロナウイルス感染症の第1波（4月上旬）と第2波（8月上旬）をピークとした流行後、やや感染者が減少し、横ばいとなった時期ではあったが、依然収束の見通しがたない状況であり、ほとんどの授業はオンライン授業が継続されることとなった。それを受け「日本語技法d」は予定していた内容を、Zoomを用いた全員参加型の同時配信授業として行うこととした。予期せぬ授業形態変更の中で、オンデマンド配信等其他の方法ではなく、Zoom授業を選択した理由は、対面授業となるべく近似した授業空間を創出し、同等の授業効果を維持することを目標としたからである。

「日本語技法d」において、シラバスでは授業内でビブリオバトルを行なう予定であった。それについても計画の見直しを迫られることとなったが、Zoomの導入によりほぼ計画通り行なうことができた。

本稿は、Zoomを使用したオンライン授業で、ビブリオバトルを実施したこととの記録と考察である。

## 1 2020年度清泉女子大における「日本語技法d」の位置づけ

最初に、「日本語技法d」が清泉女子大学の履修科目の中でどのような位置にあるかを確認しておきたい。

「日本語技法d」は、共通教養科目の一科目であり、次のように位置づけられている。

共通教養科目は、専門科目とは異なった学問分野を通して、人間及び社会の本質やそのありようを広い視野に立って総合的に判断する力を養うとともに、現代社会を生きる人としての教養を身につけることが大切であるとの考えから設けられている<sup>1)</sup>。

また、区分等は次のように設定されている（下線・筆者）。

科目名：日本語技法a、b、c、d

区分：社会への参加

年次：1～4

参考までに、前期に設定されていた類似の科目として「文章力養成」があるが、これは区分が異なり目的が異なっている<sup>2)</sup>。

科目名：文章力養成

区分：学びの技法

年次：1～3

このことから、「日本語技法d」には、大学での学修のための日本語の技法にとどまらず、より広く「社会への参加」を果たすための日本語の方法・技術を養成することが目指されていることがわかる。

そこで授業を担当するに際し、「日本語技法d」の期待される教育内容について、次のように考えた。

まず、「日本語」と、その「技法」とは何かということである。日本語とあるからには、グローバル言語の一つとしての日本語と他言語との違いを意識することが必要であろう。これを意識しながらも、実際にはほとんどの学生にとって日本語は「国語」として当たり前に使ってきたものであることを前提としなくてはならない。改めて日本語とはどのような言語かを意識することが授業の出発点となる。また、技法とは、言語を運用する、すなわち言語を用いて自身の伝えたいことを正確に誤りなく伝えたり、相手の意図するところをやはり正確に誤りなく理解したりする際の方法、技術であるといえる。ところで、国語としての日本語を、我々は当たり前に使っている、使えていると思っているが、果たしてそうだろうか。その点についても、一旦立ち止まり、改めてその特徴や技法を考えるべきだという意識で学ぶ必要があるのではないだろうか。

そこで、やがて社会に参加してゆく大学生が身に着けるべき日本語の技法として、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4要素に分けて捉えるとともに、その4要素をバランスよく身につける授業を構成したいと考えた。

授業では、まず、メール文、説明文、意見文、学術レポートといった様々なジャンルの文章を「読む」「書く」ことで、読解力、表現力を身につける実習を行なうこととした。その積み重ねをふまえ、さらに「聞く」「話す」を加えた4要素をバランスよく含む持つ言語活動の一つとしてビブリオバトルに注目し、授業に取り入れることとした。

なお、2021年度以後の入学者については、カリキュラム変更により「日本語技法」という授業は廃止され、教養科目（選択科目）「文章力表現」に統合された。「話す」要素を持つ教科としては、教養科目（選択科目）の「口頭表現力養成」が設置されているが、2021年度は開講されていない<sup>3)</sup>。

以上を念頭に作成したシラバスの主な部分を、参考までに下に示しておく。  
下線を引いたところが、ビブリオバトルに関わる箇所である。

シラバス（2020年度後期日本語技法d）

### 【授業テーマ】

大学生にふさわしい日本語の技法を身につける。

### 【授業概要】

「伝わる言葉」としての日本語の技術を理解するとともに、読む、書く、  
聞く、話す能力をバランスよく身につける。様々なジャンルの文章の作  
成、ビブリオバトルの実施などをおこなう、作業型・参加型の授業である。

### 【到達目標】

- 1 日本語表現の基礎となる文法、用字、語彙、敬語の用法を理解する。
- 2 文章作成及びプレゼンテーションに必要な思考と基本的な技術を習得する。
- 3 他者の表現を理解する態度と能力を養う。

## 2 大学教育におけるビブリオバトル

### 2-1 ビブリオバトルとは何か

はじめにビブリオバトルについてまとめる<sup>4)</sup>。

ビブリオバトルとは、考案者谷口忠大氏による造語である。谷口氏自身によって、

ビブリオ(biblio)とは「書物」をあらわす英語の接頭辞で、バトル(battle)とは「戦う」ことを意味します。(中略) このビブリオバトルは「知的書評合戦」という冠がついており、その名の通り「本の素晴らしさを書評で競う」今までにない新しい本の楽しみ方なのです。

と説明されている<sup>5)</sup>。

2007年、京都大学大学院情報学研究科の研究室で、当時、ポストドクターとして在籍し、現在はビブリオバトル普及員会事務局長を務める谷口氏が「せっかくだから、新しい面白い勉強会のスタイルをとってみたいという思い」から、本を読んではその本について発表しあうという形式の勉強会を考案した。これがビブリオバトルの始まりである。

当初のルールは、次のようなものであったという。

- 1) 自分が読んで面白かった本を発表する。
- 2) 一人がだらだら発表しないように、発表時間を決める（5分）

- 3) 終わったら、3分程度で、ディスカッションを行う。
- 4) 一番読みたくなった本、面白かった本を投票で決める。
- 5) 緊張感を持たせるために、デジタルカメラで発表動画を録画する。

このうち 5) は、著作権の問題などから現在の公式ルールには入っていないが、他はほぼそのまま現在のルールに受け継がれている。

谷口氏が「ビブリオバトルは教員の視点で生まれたものではなく、ほぼ学生に近い、一学び手の視点から生まれたものだ。」と述べるように、勉強会とはいえ、自主的で自由な雰囲気をもっており、それが幅広い年代の様々な環境の人びとに受け入れられて急速に普及していくことになる。「バトル」は本来、戦闘を意味するが、この場合はさほど乱暴なイメージはなく、学生の遊び心から名づけられたものである。読書を基盤に置いた模擬闘争ゲームといった軽めの意味であることがわかる。

こうしてビブリオバトルは大学のサークル活動を始めとして、公共図書館の催し、書店が販売促進を兼ねて主催するイベントのほか、企業内で「プレゼンテーション能力の向上」や「社内コミュニケーションの向上」を目途とした研修としても行なわれるようになった。小中高の教育現場での採用も広がっており、今後ますますの伸展が期待されている。

## 2-2 ビブリオバトルの大学教育現場での導入の実態

ビブリオバトルは、2009年に大阪大学の学生団体Scientthroughの活動として初めて外部に出た。その後、前述したような民間のイベントとして瞬く間に普及していく。2010年には京都大学の発足当時のメンバーを中心にビブリオバトル普及委員会が組織され、仲間同士の活動から公共のあるイベントへと発展する足固めがされた。2011年からは大学生日本一を決める「ビブリオバトル首都決戦」が開催されるようになり、年々規模を拡大している。

そうした学生間の広がりを見て、大学教育の場でもビブリオバトルは注目されることとなった。程無くして授業に取り入れられるようになる。早い導入の例としては2011年度に、室蘭工業大学で日本語教育分野として、佐賀大学理工学部では「技術文書作成」で、皇學館大學でも文学部の授業内で、採用されたことが報告されている<sup>6)</sup>。最近では、卒業論文を含めたアカデミック・ライティングに繋がる前段階として、3年次の「専門演習」に導入した東邦大学の報告もある<sup>7)</sup>。

こうした大学教育現場への導入において興味深いのは、「読書」を出発点とした勉強会からイメージされる文系の学部、科目にとどまらず、理系の大学、学部の技術文書関連、語学としての日本語習得に関する科目など、幅広い分野の授業で採用されていることである。それこそが、まさにビブリオバトルが含

有する日本語の技法の多様性、汎用性を証するものといえよう。

### 3 清泉女子大学におけるビブリオバトル導入

筆者は、2018年度から「日本技法d」を担当した。

この時に意識したのが、この授業の区分が、「社会への参加」であったことは前にも触れた。大学の教養科目で、「社会への参加」を目途とした「言葉の授業」が行われることの意味は、具体的にはどのように捉えたらよいのだろうか。言葉を以て社会に通用する人材の在り方とはいかなるものであるかと考えた時、つぎのような資料を参考にした。

(一般財団法人) NHK放送研修センター・日本語センターが、東証一部上場企業の人事担当者を対象に行なったアンケート結果によると、「社内のコミュニケーションに課題がありますか」という質問に対して「ある」と答えた企業は全体の71%にのぼった。「社内コミュニケーションを進める上で、課題となっていることは何ですか。(複数回答可)」に対しては64%の企業が「個人のコミュニケーションスキルの低下」をあげ、同じく64%の企業が「対面コミュニケーションの減少」も課題だとしている。

これをふまえ、「社員を採用する際、学生のどのような能力を重視しますか。(複数回答可)」という問いでは、1位の「明るく意欲があり、好感度が高い」に次いで「コミュニケーション能力が高い」が2位にあげられた(62%)。さらにコミュニケーション能力の中でも「特にどの部分を重視しますか(複数回答可)」という質問には、74%の企業が「自分の意見や事物の説明を筋道立てて話すことができる」を挙げていた。このことから、日本語の運用に関する4要素の中でも、「話す」要素こそ、企業が新人採用に際し最も重要視するスキルであることがわかった<sup>8)</sup>。

しかしながら、「話す」要素は、それだけ取り出して伸ばすことは現実的ではない。やはり、日本語の他の要素と連携させて涵養することが重要であろう。

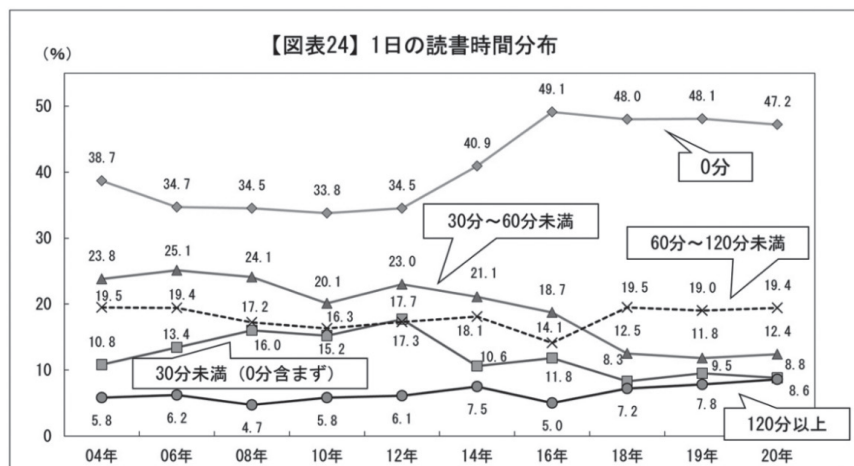
そこで想起したのは、かねてから危惧されている現代の大学生の読書離れとビブリオバトルであった。読書離れの様子は下の引用資料から読み取れる。資料自体は、最近まとめられたものであるが、参考までに掲げることとする<sup>9)</sup>。

ビブリオバトルの、本を「読む」ことをきっかけとして、自身の伝えたいことをまとめて表現し「話す」とともに、他者の考えを「聞く」ことで理解するという一連の行為は、日本語を用いた総合的な学修の方法として最適なのではないかと考えたのである。これを項目にまとめると以下ようになる。

① 読む：読書との連携

② 書く：ビブリオバトル準備段階での、書物の要約文、プレゼンテーショ





全国大学生生活協同組合連合会「第56回学生生活実態調査の概要報告」より

### ンのメモ作り

- ③ 聞く：プレゼンテーションを聞く
- ④ 話す：書物に関するプレゼンテーション、プレゼンテーションに対する質疑応答

ビブリオバトルを取り入れたとすれば、現代の大学生の読書離れに対処するとともに、読書を出発点として「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の4要素がいずれも含まれることになる。清泉女子大学の当該科目の目標である「社会への参加」を見据える意味でも有効な方法であるといえよう。

そこで、2018年度、2019年度と、全15回授業のうち後半の3回を充て実施した。教室内で4～5人の少人数グループを複数作成し、同時進行で行った。お互いの顔が間近で確認でき、普通に話す声が耳に届く距離で話し合いをすることができた。筆者が独自にビブリオバトル授業について調査したアンケート(記述式)では、「説明することの難しさを知った。」「言いたいことを順序だてて話がそれないようにするのも大切」、「本の魅力の理解だけでなく構成能力やプレゼン力もためられる」、「伝えやすくするための工夫として、相手の目を見る、表情をはっきり見せる(以下略)」といった、より良い言語運用への気づきが看取された。一方で、「本の紹介とともにその人の人となり伝わってきて、本の紹介だけではない面白さがあった。」「メンバーがとても一生懸命に聞いてくれている／笑ってくれているのを見て楽しく感じる事ができた。」「いつも



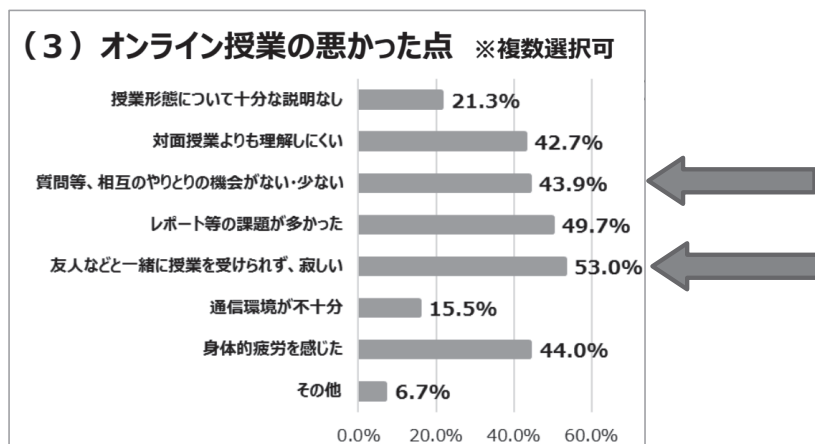
自分が選ぶ本とは違うジャンルのものも読んでみようと思った。」などの感想が得られ、概ね好評であった。

そこで、2020年度も前年度までと同様に計画をしていたところ、想像だにできなかったコロナ禍により授業がオンラインで行われることとなった。ビプリオバトルについては、当初、オンラインでの実施は無理かと思われ、授業内容の変更を考えた。しかし、期末の3回の予定を第12～15回の4回に増やし、Zoomを使用して実施することにした。

Zoom実施を決意したのは、次のような背景があった。

- ① 前期のオンライン授業を受け、オンラインの授業環境が整っていた。
- ② 前期のオンライン授業を経験し、学生、教員双方がZoomに慣れていた。
- ③ オンラインであっても、友人の顔を見たり話すことにより、クラスの一体感が出たり、良好な授業効果が期待できる。

とくに③については、次のような資料がある<sup>10)</sup>。資料は、2021年になってまとめられたものではあるが、2020年の授業実施当時、学校現場や、数々の報道においてまさにこのような感想が聞かれ、憂慮されていた。矢印は筆者が付したものであるが、特に「質問等、相互のやりとりの機会がない・少ない」、「友人などと一緒に授業を受けられず、寂しい」という2項目に注目したい。その対策にもなればとオンライン実施の決断に至った。



文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」(2021/5/25) 1. オンライン授業について

## 4 ビブリオバトル授業の実際

ビブリオバトル授業には後期15回のうち第12回～15回を充てた。当初は12～14回で実施、15回をまとめと計画したが、Zoomを使用することで授業の時間や運営に時間がかかることを想定し変更した。授業目標は、対面授業と同じく設定した。

- 1 読書を楽しもう
- 2 自分の読書の楽しさを、他者に伝えてみよう
- 3 他者の読書の楽しさを共有しよう

なお、ビブリオバトルをZoomを介して行うことで、次のような運営上の工夫を行なった。

＊本の紹介時間を4分、質疑応答を2分に短縮。

＊グループ討議形式は不可であったため、クラス全体に向けての発表（プレゼンテーション）形式で実施<sup>11)</sup>。

＊全体を2グループに分け2日（2週）に渡って実施。

なお、読書に気軽に親しんでほしいとのねらいから、紹介本は自分が熱意をもって紹介したいと思える本ならばジャンルは問わないこととした。ただし、漫画と教科書は除外した。漫画は、昨今クールジャパン等の世界的認知もあり、ポップカルチャーとしても認められ、文化的価値のある作品もあることは把握している。しかしこれまで他所での実施の経験から、漫画なら読みやすいと安易な選択をする例もあったことから、このような事態を避け、しっかりと文字を読んでもほしいと考えた結果、除外とした。

授業での実施状況は次の通りである。

### 事前説明

ビブリオバトルの授業に入る前に、折に触れ、授業の最後にビブリオバトルを行なうこと、そのための本を選び、他者に紹介ができるようによく読んでおくことを告知した。約束事として、当日は原稿を用意しないことも伝えた。これは、原稿を「読む」だけのプレゼンテーションでは魅力がないことと、本についての思いを、自分の言葉で生き生きと伝えたいからである。ただし、準備の手段として、自分なりのメモをしっかりと作るので、そのためにも、本を読みこんでおくことを求めた。

### 1時間目（第12回）ビブリオバトルに挑戦（1）

自分でプレゼンテーションを行う際のイメージを持つことを目的として、

過去の大学ビブリオバトル決勝戦の動画（11分）を視聴した。当初は、Zoomでの画面共有を試みたが、動作性が悪く断念。YouTubeのURLを示したうえで、15分時間を取り、各自視聴する方法をとった。その後、クラス全体で感想を話し合ったところ、実際の動画を見てイメージがわき、「バトル」の語感よりも和やかな雰囲気を感じて安心したという意見が多数あった。

## 2時間目（第13回）ビブリオバトルに挑戦（2）

最初に、「よいプレゼンテーションとは何か」について考えた。「話す」側としては、①自分の伝えたい内容を、正確に・誤解なく伝える。②自分勝手な「喋り」ではなく、聞き手を意識してわかりやすく話すことを確認。聞く側としては③主体的に聞くことが大切。発表者は何を伝えようとしているか、意識して聞くこととし、発表者と聞き手、両者で内容・感情を共有（＝共感）できるよう心がけることの重要性を確認した。

そのうえで、自分が選んで読んできた本をもとにしたメモ作りを行なった。プレゼンテーションを意識して詳細なメモを作成。4分のための内容ではなく、6分ぐらいの内容を書くつもりで、本番ではそれを凝縮して話すくらいにして内容を充実させるよう指示した。

メモが完成したところで、ビブリオバトルの練習を行った。この練習は、Zoomのブレイクアウトセッション機能を使用し、学生同士1:1で行なった。練習は、本番通り本の時間配分で行った（プレゼンテーション4分、質疑応答2分、発表者の交代30秒）。

その後、自己チェック表（事前に学びの泉で配布）を用いて、自己評価を行ない、本番への手順の確認と準備につなげた。

## 3時間目（第14回）ビブリオバトルに挑戦（3）

ビブリオバトル（1日目）を実施。本来ならば、進行係や発表順も、各グループで互選するのだが、今回はスムーズな運営のために、発表順は予め教員が指定し、進行係も教員が行なった。また、記録用紙を事前配布してチャンプ本の投票準備ができるようにした。

1日目は通信障害もなく、無事に進行し終了した。この日のチャンプ本は、学びの泉アンケート機能を使って投票することとした。しかし、この方法ではプレゼンテーションとチャンプ本の決定・公開に時差ができてしまい、ビブリオバトル本来の即時性が失われ面白さが減ってしまう結果となった。これにより、次回は投票方法の工夫を要することとなった。

#### 4 時間目 (第15回) ビブリオバトルに挑戦 (4)

ビブリオバトル (2日目) 実施。1日目と同様に実施、通信障害もなく終了した。チャンプ本は、Zoom の投票機能を使って決定した。このため、チャンプ本に選ばれた人はその場で全員から拍手を受けることができ、成功であった。

#### 事後まとめ

ビブリオバトル2日目が最終授業であったため、振り返り、感想等を授業レポート (記述式) として学びの泉のアンケート機能で回収した。その結果はすみやかに PDF にまとめ、学びの泉経由で配布した。

## 5 ビブリオバトル実施のまとめと考察

ビブリオバトルを Zoom で実施したことのまとめとして、筆者がビブリオバトル授業終了時に学びの泉を通じ独自に実施した授業レポート (記述式) から抜粋した内容を以下に示す。

### 〈発表について〉

- 練習により4分は短く感じた。
- 実際に4分間のプレゼンテーションをして、とても長く感じた。この時にメモ書きの重要性を実感した。
- 練習と本番では、心の落ち着きが違うのだと感じました。

### 〈本について〉

- ビブリオバトルで、同世代がおすすめる本を知ることができてとてもいい機会になりました。
- ビブリオバトルの発表用メモを作成した際、見落としていた部分に気づくことや新たな発見があった。
- 紹介する本がかぶってしまった人がいました。だけど、二人ともその本に読むにあったての視点や読み方、考え方、好きなシーンが異なっていました。全く同じ本を読んだはずなのに、人によっては全く異なる見方をするのだと実感しました。
- お気に入りの本にはその人の性格とか、趣味とかがとてもそこ表れている感じがしておもしろいなと感じた。

### 〈ビブリオバトルについて〉

- 伝えたいことを時間内にまとめて自分の言葉にすることというのは簡単

ではなく、それには多くの訓練が必要である。

- 全てを詳しく説明するのではなく、詳しく話すべき点を選び紹介したい。
- ただ話したいことを話すだけでなく、相手にわかりやすいように、伝わるようにすることはさらに難しいと思った。
- ビブリオバトルにおいて身振り手振りなどのボディランゲージを取り入れることは聴衆に思いが伝わりやすくなるために良い表現方法であると思うが、やり過ぎると感情だけが先走っているかのように見えてしまうこともあるため、程度に気を付ける必要があると思った。
- ビブリオバトルを通して自分が何を伝えたいのか、どう伝えるべきかなどを考えることができた。

以上の結果より、オンラインでのビブリオバトルではあったが、学生は事前の選書、読書を含め、授業の進行に従ってよく準備をした様子が見えられた。「4分間は長かった」、「思ったより短かった」、と感想が分かれたが、きちんと本を読みこみ、準備をした学生ほど短く感じたように見受けられた。

全体としては、読書や発表そのものに手ごたえを感じた学生は多い。とくに、「伝えるためには訓練が必要」「相手にわかりやすいように、伝わるようにすることはさらに難しいと思った」など、言語を用いて伝えるために技法を磨き充実させることへの了知があったことは重要である。さらには、「自分が何を伝えたいのか、どう伝えるべきかなどを考えることができた」とコミュニケーションの根幹を考えるものがあり、加えて、発表時の目線やボディランゲージなど、コミュニケーションの方法の広がりへの発展的な言及もあったことは、注目すべきであると言えよう。

また当初は、授業の中で直接的に優劣をつけるようで、抵抗感を持たれるかと危惧されたチャンプ本の決定についても、純粹にゲーム性を楽しむというレベルで受け取られ、楽しめたとの記載もあったことを紹介しておきたい。

ここで注意したいのは、以上のまとめは、3章で述べた対面授業時のビブリオバトル実施後のアンケート結果とほぼ同様の結果が得られたことである。これは、オンラインであっても対面とほぼ同質の授業効果があったと理解される。オンライン特有の内容としては、「オンラインでの発表なので、目線をカメラに向けるように意識して話す必要があると感じた。」との記述があった。これは、対面とは異なる状況で、伝えるべき相手を意識し言語を運用することへの重要な気づきであるといえる。コロナ禍収束後も益々利用されるであろうオンラインコミュニケーションの修練にも今回のオンラインでのビブリオバトル実施の経験は生かされるのではないかと。

以上の結果から、目標として掲げた、1 読書を楽しもう、2 自分の読書の楽しさを、他者に伝えてみよう、3 他者の読書の楽しさを共有しようという 3 項目は、Zoom であっても、概ね対面実施と同様に達成できたといえる。

## 6 おわりに ——Zoom ビブリオバトル実施の成果と今後の課題

新型コロナウイルス感染症の影響で、やむなく実施することになった Zoom を用いたビブリオバトル授業ではあったが、学生がかなり Zoom に慣れていていたことと、なるべく教室で対面授業をしている雰囲気づくりに努めたこともあり、各回の課題への取り組みはスムーズに進んだ。その結果、コロナ禍でクラスの交流や連帯感が感じにくい中でも、ビブリオバトル授業の質を保つことができ、共に学ぶ環境と一体感を醸成することができたのではないかと考えている。

ビブリオバトル授業実施の成果に特化したものではないが、対面授業とオンライン授業を比較したデータとしては、参考として次のような結果が得られている。筆者が担当したこれまでの「日本語技法 d」に関する清泉女子大学授業アンケート結果から、授業のオンライン化の影響に関わると考えられる項目について抜粋し作表したものである。

〔日本語技法 d〕 清泉女子大学授業アンケート結果より（抜粋）

質問項目	回答	2018年度 (13*) 対面授業	2019年度 (7) 対面授業	2020年度 (13) オンライン授業
授業時間中に、しっかり授業を受けましたか	とてもしっかり受けた	31%	57%	77%
	ややしっかり受けた	62%	43%	23%
授業時間内外の課題にしっかり取り組みましたか	とてもしっかり取り組んだ	31%	43%	69%
	ややしっかり取り組んだ	62%	57%	31%
(アクティブラーニング導入科目) 質疑応答やグループ活動に活発に積極的に参加できましたか(文字等によるやり取りを含む)	とてもよくできた	0%	20%	44%
	ややよくできた	60%	80%	44%

\*括弧内の数字は、授業アンケートの回収総数

(作成：太田)

表からは、学生の授業への集中度は、オンライン化（Zoom）によって上がっている傾向にあることが読み取れる。授業参加のためには、常に目の小さなPC画面に集中し、それを通してその向こうにいる教員やクラスメイトを意識しつつ課題に取り組む必要があることが、集中度が増した要因の一つであると考えられる。ただしその中で、ビブリオバトルの実施が、どの程度この結果に寄与しているか判定することはできない。

しかしながら、自由記述の中に「ビブリオバトルなどオンライン授業の中でも実践的な授業を行なっていたので、楽しみながら授業に参加することができました。」という意見があったことは注目に値しよう。オンライン授業全体の中でもビブリオバトルが、学生の意識の中で、主体的な取り組みに関し大きな位置を占めたことが類推できるのではないか。それに加え、授業担当者としては、当時の閉塞的な授業環境のなかで、なによりも、学生自身が楽しいと感じる学びの場を提供できたことには大きな手応えを感じた。これは、3章でも述べたような、当時問題となっていた、学生の孤独感や、質問や交流がしにくい一方的な授業への不満の解消にも役立ったのではないかと考えている。

そのうえで、Zoomでのビブリオバトル授業の成果としては、次の3点にまとめられよう。

- ① コロナ禍で外出が不自由な中でも、学生の自主的な取り組みとして選書、読書、プレゼンテーションへという、統合的な取り組みができた。
  - ② 慣れたツール、慣れたメンバーにより、安心して発表することができ、結果として、読書による交流により、各自の視野が広がるとともに、コロナ禍の授業であることの閉塞感を多少なりと和らげることができた。
  - ③ 教員としては、Zoom実施により、全員のプレゼンテーションをじっくり聞くことができ、評価に生かすことができた。
- 一方、以下の点については、さらなる課題として考えてゆく必要がある。
- ① 自主的な取り組みに任せるが故に、中には準備がぎりぎりの学生もでてくることとなった。きめ細かい指導体制を再考したい。
  - ② 2018年度、2019年度のグループ討議形式の時に比べ、質疑応答が活発ではなかったという反省がある。進行係が教員であったこと、実際の対面ではないことが影響したと考えられる。
  - ③ 授業の出欠にも関わるので、常時顔出しとしたが、Zoomで顔を出すことに抵抗感を持つ学生は一定数いる。聞く態度にも関わるので、より積極的に顔出しができる雰囲気を作り出せるようにしたい。

今後に向けて期待されることは、これを授業内での1回限りのイベントに終



わらず、自身の読書行動や言語表現の研鑽につなげたいということである。日本語技法の科目は廃止となったが、新たに設置されている「口頭表現力養成」等においても、有効な学修内容となり得るのではないだろうか。

また、ビブリオバトル自体も、機会があれば学内で継続して行うなどの発展があればよいと考える。図書館活動の中で行われているということも聞くが、認知度はあまり高くないようであることが残念である。学園祭などの折に、イベントとして行うことで、楽しく日本語の技法を身につけ伸ばす機会があればよいと願っている。

## 注

- 1) 「清泉女子大学 2020 年度学生要覧」 p. 60
- 2) 「清泉女子大学 2020 年度学生要覧」 p. 88 共通教養科目の履修 表 5-1 共通教養選択科目表
- 3) 「清泉女子大学 2021 年度学生要覧」 p. 91-92
- 4) 拙稿「『国語表現』におけるビブリオバトル導入の試み—総合的な国語表現力涵養のために—」『東京未来大学研究紀要』11号 2017年12月
- 5) ビブリオバトル普及委員会編『ビブリオバトル公式ガイドブック ビブリオバトル入門～本を通して人を知る・人を通して本を知る～』『まえがき』一般社団法人情報科学技術協会 2013年6月1日
- 6) ビブリオバトル普及委員会編『ビブリオバトル公式ガイドブック ビブリオバトル入門～本を通して人を知る・人を通して本を知る～』『まえがき』一般社団法人情報科学技術協会 2013年6月1日
- 7) 伊藤恵美子「アカデミック・ライティングに向けて—ビブリオバトル導入の試み—」『東邦学誌』第46巻第1号 2017年6月
- 8) 一般財団法人 NHK 放送研修センター「2012 年ビジネス・コミュニケーション調査」[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kento/kento\\_07/pdf/shiryo\\_3.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kento/kento_07/pdf/shiryo_3.pdf) 最終閲覧 2022/01/30
- 9) 全国大学生協同組合連合会「第 56 回学生生活実態調査の概要報告」 p. 13 (2021 年 3 月 8 日) [https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf\\_report56.pdf](https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report56.pdf) 最終閲覧 2022/01/30
- 10) 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」(2021/5/25) p. 2 [https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) 最終閲覧 2022/01/30
- 11) グループ討議自体は、ブレイクアウトセッションの機能を使用することで可能であるが、同時進行となると、評価が難しくなるために、この方法での実施は不可とした。

## 参考文献

- 岡部信彦「これまでの出来事の総括 (chronology)」 「日本と世界における新型コロナウイルス感染症の流行」
- 土橋西紀、砂川富正、鈴木基「日本と世界における新型コロナウイルス感染症の流行」
- 上記はいずれも『日本内科学会雑誌 109 巻 11 号』 2020 年 11 月 10 日 [https://www.naika.or.jp/jsim\\_wp/wp-content/uploads/2020/11/nichinaishi-109-11-article\\_3.pdf](https://www.naika.or.jp/jsim_wp/wp-content/uploads/2020/11/nichinaishi-109-11-article_3.pdf) 最終閲覧 2022/01/30